
雪解水の流るゝ頃に

流ゆうな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪解水の流るゝ頃に

【Nコード】

N7855C

【作者名】

流ゆうな

【あらすじ】

「本当の愛って何ですか？」六人の少年少女が織り成す『愛情』と『友情』の物語。同性のひとを愛することは決しておかしいことなんかじゃない。

00 / ノプロローグ

廊下はぼんやりと夕暮れ色に染まっていた。

調理室の扉を隔てた向こうから聞こえる、楽しそうな笑い声。

私はいつもひとりぼっちなのに、彼女たちはいつも一緒にいる。

それが、とても羨ましくて、……とても、妬ましかった。

本当はいけないことだとわかっていた。

ただの八つ当たりには過ぎないことも自覚していた。

それでも私は思ってしまったのだ。

“彼女たちの日常を壊したい” と。

その日は雨が降っていた。

教室の窓から外を眺めて、藤原かなめは溜息をついた。かなり憂うつだ。

それというのも、今日は学校が終わった後に、百合子と出かける予定だった。昨日作りすぎたクッキーが余ったから、それを食べながら町めぐりでもしようか、と話していたのだ。

だが、この雨では行けそうにもない。雨上がりの散歩というものもまた一興だが、この分では夜まで雨は降り続けるだろう。折角、百合子と出掛けられるというのに、何ともついていない。その上、今日は数学のテストがある。……憂うつだ。

「あーあー憂うつそうだねえ、“かなちゃん”も」

「……今私のことをからかうと、漏れなく拳骨が十回ついてきます」
「そりゃ大変だ」

大変だなんて欠片も思っていない顔で笑う仲眞みどりは、かなめの頭をぽんぽんと叩きながら言った。人の頭を太鼓か何かのように叩くのはやめて欲しい。

「かなめが憂うつそうにしてるから、“百合のお姫様”も憂うつそいな顔してるよ?」

「え?」

言われて見れば、斜めと少し前の方に座っている百合子は確かに、時々ちらちらと不安そうにかなめを見ては、小さく溜息をついている。

……そういえば、姉が言うには憂うつなときのかなめの表情は、とてつもなく不機嫌そうに見えるらしい。きっと、百合子は理由もなく、かなめの機嫌が悪いのは自分のせいだと思い込んで落ち込んでいるのだろう。志水百合子はそういう人間だ。

未だ、ちらちらと此方を窺っている百合子はなんとというか、小動物のようでも愛らしい。

さっきまで憂うつだったことなど忘れて、思わず笑みを浮かべると、ちょうど此方を見た百合子が安心したようでほっと息をついて席を立った。

「かなめさーん、顔が緩んでますよー」

「みどり、ちよっとうるさい」

「ひどいっ!」

「かなちゃん、おはよう」

「おはよう、百合子」

横でぶーぶーと文句を言っているみどりは無視して、花の綻ぶような笑顔を眺める。どんな天気でもすぐに晴れにしまいそうな愛らしい笑顔。これに落ちないなんて、雷神様もお堅いものだ。

「かなめのは鼻屑目が入りすぎてるんだよ。確かに百合子は可愛いけどさ」

「みどり……砂糖大量のショートケーキと、唐辛子のシフォンケーキ、どっちがいい？」

「うえ、……どうしても、選ばなきゃ、駄目？」

「上目遣いしても駄目」

「うづ……じゃあ、砂糖大量のショートケーキ……」

「了解」

「今、頑張つて甘いもの控えてるのに」

「それはそれは、残念だったね」

真面目な顔でよしよし、と頭を撫でるかなめと、うえ〜んと泣き真似をするみどり。それを百合子がくすくすと笑いながら見つめている。そんな、楽しく、少し切ない、日常。

「あーっ！」

「どうしたの？」

「忘れてた！一時間目、体育に変わったんだっ！」

「……本気ですか」

「本気ですよ！やっべえ、急がないと！」

「朝から体育……いやだなあ」

「かなちゃん落ち着いてる場合じゃないよう、急がないと怒られちゃうー！」

「確かにそうだね。急ごうか」

ジャージの入った袋をもって急いで教室を飛び出す三人。
百合子は怒られたくないよう、と泣きそうな顔で走り、
みどりはこりゃもうアウトだねえ、と笑いながら走り、
なんで言い忘れてくれるかなもう、と溜息をつきながら走ってい
たかなめは、渡り廊下の真ん中でひとりの少女とすれ違ったことに
気が付かなかった。

……その少女が、しばらく自分を睨んでいたことにも。

01 / ハジマリ

結局、移動や着替えて手間取って、体育館についたのは始業ベルの鳴った十分後だった。

額に青筋を浮かべて立つ体育教師の前、上手い言い訳も思いつかずに三人揃ってこっ酷く叱られた。

「まったく、荒川はおっかないよねえ」

嫌だ嫌だ、とみどりが首を振る。

そもそも、みどりが授業変更のことを忘れていなければ、怒れられずに済んだと思うのだが。……まあ、終わったことをどうこう言っても仕方が無い。

「ハゲの癖に威張り腐ってるしさ！まったく、自分を何様だと思ってるんだか！」

多分、必要以上に熱血なだけで威張っているわけではないだろうし、きつと、荒川は自分のことはあくまで「先生」だと思っていないだろうなあ。ハゲの癖についていうのもあまり関係ないしなあ。

……などと、心の中でつつこんでおく。隣ではまだみどりが荒川の悪口を並べ立てている。よくそんなに悪口が浮かぶなあ、ある意味尊敬ものだ。歌でもうたうかのようにすらすらと紡がれる言葉に百合子も苦笑している。

「ねえ、あなた」

さらに、肩ほどで整えられた焦げ茶の髪が揺れる。瞳を細めて微笑んで、目の前に立っているこの人は 嗚呼、そうだ、この学校の生徒会長である、小笠原直。

「あなた、二年の藤原かなめさんで間違いないかしら？」

「はい」

「そう。あなたに話があるの、放課後、生徒会室に来ていただける？」

「……？」

目の前で微笑む彼女は、美人で頭も良く成績優秀なため、先生方のお気に入り。だが、家が大きくて所謂『お嬢様』らしく、幾分我侭なのが欠点だと聞く。それも、自分のやることはしつかりやった上で我侭をいうから、誰も文句を言えないそうだ。

……それはともかく、生徒会長が私に何の用事だろうか？
首を傾げて記憶を辿るが、思い当たるような節はない。
みどりと百合子もきよとん、として私達を見ている。

「なにか、放課後に予定がお有りかしら？」

「いえ、ありません」

「じゃあ、約束。今日の放課後、必ず生徒会室に来て頂戴。それじゃあ、また後でね」

言いたいことだけ言って立ち去ってしまった彼女の背中を見つめてはて、と首を傾げる。

「……かなちゃん、なにかしたの……？」

「いや、思い当たる節は何も……」

「かなめが校則破つたりとか、そんな面倒なことするわけないもんねえ」

「でも、生徒会長さん直々に呼び出されるなんて……かなちゃん、ほんとに何もしてない？」

百合子が心配そうに尋ねてくるが、幾ら考えても心当たりなどこれっぽっちもない。

だが、約束してしまった以上、理由がよくわからなくとも放課後、生徒会室に行くしかないだろう。

溜息をついて、窓の外を見る。

雨はまだ、降り続けていた。

夕方になってもやはり雨は降り続けていた。

灯りのついていない薄暗い生徒会室の中、先程からずっと続いている沈黙を、先に破ったのはかなめだった。

「何の用事があつて私を呼び出されたのですか、生徒会長？」

「……………」

「……………用がないのなら、帰らせていただきますが」

「……………あなた、隠し事があるそうね」

「は？」

唐突に何を言い出すのだろうか、とかなめは首を傾げた。

隠し事などというのは、誰にでもあるものだと思う。ひとによって大なり小なりの差はあるだろうが、ひとつやふたつ、言いたくないことや言えないことがあるのはおかしいことじゃない。

「……………それが、どうかしましたか？」

「大切なひとに、隠し事はしないものではなくて？」

「……………今いち、あなたの言いたいことが理解できませんが」

「じゃあ、はっきり言わせていただこうかしら。あなた、

レズビアン”でしょう？」

くす、と嫌な笑いを浮かべる直を見つめ返すかなめの表情は固かった。きつく睨み付けるような視線が、どうして知っている、と問いかける。だが、直は笑顔を浮かべて首を傾げるだけだった。

押し寄せる焦燥を抑えるかなめに対して、直は余裕だ。

「これ、みんなに知られたら困るわよね？」

「……………」

「そんなに睨まないでちょうだいな。ひとつ、お願いを聞いてくれたらわたくしはこのことをヒミツにするわ」

「どういう、ことですか」

「簡単なこと。藤原かなめさん　あなた、しばらくわたくしの召使いになつてくださる？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7855c/>

雪解水の流るゝ頃に

2010年10月10日05時37分発行